

心と言葉の翻訳 要約

〈はじめに〉

【要約】

- 「心と言葉の翻訳」は、翻訳のパラダイム転換となるものである。
- 翻訳対象を「社会的要請」「個人的要請」「思考（理知）」「情報構造」「モダリティ」「文体」「創発」の7つの要素に分けて分析する。
- 以下の4つの目標を設定する。1)翻訳の関係領域を広く深くカバーする。2)英文和訳に代わる新しい翻訳モデルを提示する。3)翻訳学習の総合教科書として機能する。4)日本語人の英語学習ツールとして利用できる。

〈理論編〉

1章 翻訳の前提

【要約】

- 人間は、いきものとしての認識、言葉のレンズを通しての認識という、ふたつの方法でこの世界を認識している。
- そのため、言葉が違えば世界の認識の仕方が変わる。ゆえに、英語ネイティブの世界認識と日本語ネイティブの世界認識とは同じでない
- 人間は、言語を通じて世界を「モノ」と「コト」とに切り分けて世界を認識している。
- 人間は、「天の視点」と「人の視点」という2つの視点を切り替えながら世界を認識している。

2章 翻訳の基盤

【要約】

- 「心と言葉の翻訳」の翻訳観の最大の特徴は、言葉ではなく、人間を翻訳の中心に据えることにある。
- 「心と言葉の翻訳」の翻訳観の根底には、人間と社会に対する新しい価値の創造がある。
- 翻訳においては効率性や簡便性の追求に重点をおいてはいけない。
- 言葉にとって絶対に失ってはいけないものは豊かな生命感である。翻訳文では、心に響く生きた文章を生み出すことが翻訳の本質である。
- 「心と言葉の翻訳」では翻訳に対して次の前提を設けている。(1)完全な翻訳はあり得ない。訳文は翻訳者によって異なる。(2)翻訳は原文に忠実かどうかでなく、生み出した価値の大きさを評価する。(3)「ことば」ではなく「こころ」を翻訳する。(4)「思考の基本単位」を翻訳の基本単位とする。(5)テキストを全体として翻訳する。(6)英日翻訳と日英翻訳に同じ手法を用いる。

- 翻訳の際に翻訳者が必ず守るべき規律は次の2つである。(1)わかっていないことは訳してはいけない。(2)おかしな文章は書いてはいけない。ただしこれは理想論である。理想と現実のはざまでもがくこと、必死でもがき続けることが現実の翻訳者のあるべき姿である。

3章 心と言葉の翻訳

【要約】

- 翻訳のモデル化の最大の意義は、モデル化をすることによって翻訳が属人的な「名人芸」から社会的な「スキル」へと変わることにある
- 従来の翻訳の標準モデルである英文和訳モデルとその派生モデルは、翻訳モデルとしてのクオリティが低く、現代社会のニーズを十分に満たしていない。私たちに英文和訳/和文英訳モデルに代わる新しい翻訳モデルが必要となる。その新しい翻訳モデルのひとつが「心と言葉の翻訳」である。
- 英文和訳モデルは、語と語における一対一対応をその基本原則とする。英文和訳+編集モデルは現在の翻訳で最もよく用いられている翻訳モデルである。まず英文和訳モデルで「下訳」をつくり、日本語として不自然な部分の書き換え（編集）をしていく。この場合、原文の英語は英語ではなく日本語の意味を呼び出す単なる呼び出し記号になってしまう。この場合、私たちは英語を読んでいるのではなく、英語のかたちをした記号を通じて日本語を読んでいるのである。
- 和文英訳モデルについては、これまで日本には存在しなかった。これは西欧の文明文化を輸入することだけに専念した明治期以降の「追いつけ追い越せ」型日本のあり方を象徴している。
- 時代は変わった。日本は「追いつけ追い越せ」の情報受信型から、世界をリードする情報発信型の国へと変わっていかねばならない。「心と言葉の翻訳」を使えば、英語から日本語への翻訳だけでなく、日本語から英語への翻訳も同一の翻訳理論と翻訳手法を使うことができる。
- 「心と言葉の翻訳」は「ゲーム・チェンジャー」である。「心と言葉の翻訳」の登場によって、英文和訳モデルは馬車やそろばんと同じ運命をたどることになるだろう。
- 「心と言葉の翻訳」での翻訳の対象は言葉そのものではなく、思考あるいは心の働きである。言葉とは思考（心の働き）の反映だと「心と言葉の翻訳」では位置づける。したがって「心と言葉の翻訳」では、原文から訳文へと直接的に翻訳がおこなわれるのではなく、まず原文を通じてそれを書いた人の心の働きを理解する。そしてその心の働きに対応する心の働きを翻訳者が自分の心のなかにつくりだし、それを別の言語として表出する。これが「心と言葉の翻訳」における翻訳プロセスである。
- 「心と言葉の翻訳」での翻訳対象となる要素は、①社会的要請、②個人的要請、言葉のなかの③思考、④情報構造、⑤情意、⑥文体、⑦創発の7つである。「心と言葉の翻訳」では日本語と英語とのあいだでこれらの要素を対応させて翻訳をしていく。ただし、そうした各部分の翻訳の総和が最終的な翻訳になるというわけではなく、それぞれの要素のあいだでの包括関係を前提とする。

- ①社会的要請——「社会」にはそれぞれに個性がある。それぞれの社会的要請（ニーズ）がある。それにあわせて個人のニーズも変わり、個人の心の働き方も変わる。したがって、それぞれの社会の要請に合わせたかたちで翻訳をしなければならない。
- ②個人的要請——文章を書く、読むは個人の営みであるから最終的には社会的グループの判断よりも個人の判断が優先される。したがって翻訳者も想定読者となる個々人の個性について考慮する必要がある。
- ③思考——「心と言葉の翻訳」では分析の単位として「思考の基本単位」「思考の複合単位」という概念を設定している。英語の場合には「Subject-Predicate」を思考の基本単位と規定する。日本語の場合には「補語＋述部」を思考の基本単位と規定する。
- ④情報構造——「心と言葉の翻訳」では情報構造（旧情報・新情報、情報の焦点、情報の重さ、他）を思考と同様に基本的に言語の枠を超えた普遍的なものと規定する。ゆえに日本と英語の情報構造とのあいだには一対一関係が原則的に成立する。
- ⑤モダリティ（情意）——「モダリティ」は「対人的モダリティ」（事象（命題）に対する話し手/書き手の判断や意志を示す言語機能）と「対人的モダリティ」（聞き手/読み手に対する話し手/書き手の配慮や気配りを示す言語機能）の2つ分けることができる。日本語はモダリティを極めて重視する言語であり、その表出を必須とする。英語はモダリティを重視しない言語であり、その表出は任意である。
- ⑥文体——「心と言葉の翻訳」は、文体を「言葉の持つ個性や特徴が書き手/読み手の心と与える影響」と定義する。この定義をベースとして「心と言葉の翻訳」は、日本語と英語のように文化的・言語的差異が非常に大きな言語間でもある程度の翻訳は可能であると想定する。
- ⑦創発——翻訳について考える際に①から⑥に挙げた分析の網から零れ落ちてしまう何かのことを「創発」と呼ぶ。創発がいかにかに生み出されるかは分析ができない。心と体で感得するしかないところがあり、それゆえに翻訳は技能であると同時にアートでもある。

4章 翻訳の将来

【要約】

- 時代の変化とともに日本社会において英日翻訳の果たす役割が非常に小さくなった。これまでのように社会にとって必要不可欠なものという位置づけではなくなった。
- 翻訳が社会にとって不可欠ではなくなった現在こそ、日本人がこれまでの翻訳への過剰依存から脱却する絶好のチャンスである。西欧の事物をただやみくもに輸入するという後進国的で未熟な翻訳のあり方は捨てて、本当に必要な情報のみを最良のかたちの日本語に翻訳するという、成熟した翻訳のあり方に変えていくべき時期がきた。翻訳技法という観点からみれば、直訳、英文和訳という呪縛から解き放たれて創作的な翻訳へと向わなければならない。日英翻訳については十分な日英翻訳能力を有する日本人翻訳者をいかに育てていくかが最重要課題のひとつである。
- これからの翻訳者に求められる能力は、(1)日本語の高度な知識と運用能力、(2)高度な専

門知識、(3)IT の知識と技術力である。

- 翻訳の将来を展望すると量は減ってくるものの質の高い本物の翻訳に対するニーズは増える
私（成瀬）は考える。

〈技法編〉

【要約】

- 翻訳技法の最大のメリットは、翻訳での「暗黙知」を形式化し、それを多くの人々のあいだで共有化
できることにある。
- 翻訳技法を用いることの第 2 のメリットは、それが翻訳の実践で役に立つということである。
- 「心と言葉の翻訳」は、「直訳」「英文和訳」「英文和訳プラス編集」といった従来の翻訳モデルの上
位互換となる翻訳モデルである。
- 「心と言葉の翻訳」で最も重要な評価基準は「価値の創造」である。
- 「心と言葉モデル」での言語観・翻訳観での分析の起点は、「“ころ”はどのような“ことば”によって表
現されているのか」という問いかけである。つまり、「ころ」の立ち位置から「ことば」をみる。
- 英日翻訳の実践でなによりも大事なものは、言葉の観点からの一対一対応という縛り、すなわち「直
訳の呪い」から完全に解き放たれることである。

〈英日翻訳の技法〉

【要約】

- 思考の単位ごとに訳す——私たちが文章を読むときには、思考の単位ごとに時間の流れにあわせて
動的な言語理解をおこなっている。従って訳出でもその思考の流れをできるかぎり保持するべきであ
る。
- 言い換え処理——訳す際には原文を変えてしまってもかまわない。「心と言葉の翻訳」では、訳す対
象は言葉そのものではなく、言葉をつうじて表現される人間の心である。言葉のかたちにこだわる必
要はない。
- モノ・コト変換——名詞化された内容を、もう一度、動詞表現に戻す言い換え処理のことをいう。
- 原文の構文変更——分詞構文や前置詞句を使った複雑な構文のセンテンスに対しては、構文変
更の処理をすることで訳出を効率化することができる。
- トピック処理——「主語・述語（サブジェクト・プレディケート）型言語である英語でのトピック表現に
あたる部分を、主題・述部（トピック・コメント）型言語である日本語のトピック表現へと適切な判
断のもとに処理する。
- 名詞認識の訳出——3 層の認識判断をせざるを得ない英語の名詞表現を、複数の認識判断を
必要としない日本語の名詞表現へと移し替える。ただし、英語の名詞認識のすべてを日本語に移
し変えるのではなく、テキスト全体の内容を写し取るうえで必要な部分だけに対応させればよい。
- 代名詞認識の訳出——主な訳出技法としては省略と還元が考えられる。
- 指示認識の訳出——英語の this, that と日本語の「これ、あれ、それ」とでは、本質的な部分で

違いあり、完全な一対一対応はできない。

- 動詞認識の訳出——「助動詞」に関しては客観性と主観性をいかに処理するかが大きな課題となる。「完了相」は「～ことがある」「～ている」などのかたちを用いて訳されることが多いが実際の翻訳ではそうしたかたちにあまり捕われずにもっと自由に訳したほうが翻訳としての価値を上げやすい。「進行相」は英文和訳で頻繁に用いられる「～ている」も使えないことはないが実際の翻訳では、それだけではなくさまざまな表現を駆使するほうが翻訳としての価値が上がる。「受動態」については「れる・られる」のあいだに完全な一対一対応関係を設定することは不可能である。「時制」では、過去時制と「～た」は一対一対応をしない。現在時制と「～る」も一対一対応をしない。「否定」に関してはその表現の位置、日本語の「ない」は「否定」ではなく「非存在」の表現、日本語の名詞の否定はない、などの点に注意が必要である。
- テキスト構造の訳出——技法としては、つなぎ表現を利用する、図表を利用する、などがある。
- 無駄を省く——技法としては、表現をシンプルにする、文を書き換える、省略できる要素を見つける、複合漢語を利用する、などがある。

〈日英翻訳の技法〉

- 日英翻訳の前提は、良質の(グローバル)英語が書けることである。実際のところ、それができなければ日英翻訳ができないだけでなく、英日翻訳も(本当に意味では)できない。
- 日英翻訳の最大のポイントは、以下のとおり、「手順どおりに処理する」ことである。
- まず原文の日本語を「思考の基本単位」に分割する。つぎに思考の基本単位をそれぞれに訳す。話し言葉ではこの段階の訳出で十分である。
- だが、書き言葉としてはこのような原子命題文ごとの訳出では不十分である。そこで2つの原子命題文を統合化して1つ分子命題文に組み立てなおす。典型的なかたちはS-P+Mである。
- 実際の日英翻訳では、3つ以上の原子命題文を組み合わせた、さらに複雑な分子命題文のかたちが必要となることがある。そうした処理の際によく用いられる技法が名詞化である。
- また英文をつくる際に必ず注意しなければならないのが情報構造（旧情報/新情報、情報の焦点、情報の重さ、情報のフロー）の訳出である。それぞれにおいて適切な処理をおこなっていかなければならない。
- 日英翻訳において最も重要なポイントは Subject をいかに決めるかである。まず、日本語の「～が」「～は」の部分だけを Subject とするのは間違いである。ほかの要素が Subject にふさわしい場合は非常に多い。さらには日本語の独立文が英語千センテンスの Subject にふさわしい場合もある。また「～れば、～すると」といった条件を表す日本語表現が英語センテンスの Subject にふさわしいケースも多い。
- 日英翻訳で訳出が非常に難しいのが日本語でのモダリティ表現である。たとえば「～である」等の日本語の断定モダリティ認識は日英翻訳では表現できない。「～なる」
- 日本語のさまざまな文末表現（～する、～なる、～い、～た/～だった、～ている/～ておく/～

である/～てしまう、～れる/～られる、～せる/～させる、～だろう、～と思われる/～と考えられる、～と思う、他) については「直訳の呪い」を断つことが極めて重要である。

- 日英翻訳での英語の文体に関して最も重要なことはあまり気を使いすぎないことである。ネイティブに通じない」というフレーズは日本人の英語コンプレックスにつけこむ詐欺的な英語ビジネスの常套句であるが、その仕掛けとして最もよく用いられるのが文体の違いである。そうした罠に陥ってはいけない。
- 現実的には愚かな社会的要請のために時として平明体以外の文体が必要となる場合もある。法律文体、行政文体、学術文体などがその例である。これらの文体の訳出が社会的要請として必要な場合には、基本的な処理を越える特殊な処理をおこなわなければならない。
- 日英翻訳でのテキスト構造の訳出は非常に難しい。大事なことは、日本語原文の構造にこだわらず、英語訳文が最大価値を持つことを目標とすることである。具体的には主題ごとのパラグラフ化、情報のつながりの整備などが挙げられる。
- 日本語と英語のあいだでの音の翻訳は不可能である。だからといって音を通じて作者がそのテキストに込めた何かを無視していいはずはない。可能な限りにおいて、その「何か」を翻訳していくことが翻訳者には求められている。